

美濃和紙と共に

（藤田一夫翁^{おち}の半生から）

わしは、岐阜県の山の中、美濃市^{かたじ}片知、天人が住むような高いところに住んでおる。

大正四年（一九一五年）十一月三日、紙漉^{かみす}きの家に生まれた。

おじいさんの代は夏場は百姓をして、冬の農閑期に紙を漉いておった。おじいさんの話を聞いていて、一番記憶に残っておるのは、昔は尾張侯の紙を漉いておったということでの。そのころは、なんでも一生に一度は伊勢参りに行くというふうで、娘を連れて伊勢に行った。そのとき美濃の渡しで、船頭が娘をからかったそう。おじいさんが、「尾張の紙を漉くものに何事だ」と言ったら、船頭が体を震わせて恐れ入ったと言うことじや。長良川を治める尾張の殿様の紙を漉く人かと、びつくりしたらしい。山の中の紙漉きじやったが、おじいさんは胸を張って生きておったじやらあな。

その後を親父が継いでやっておったが、親父のころは紙を夏場もやっておった。ただ、問題は夏場はトロロアオイが出んでなあ。ノリウツギで漉いておった。試験場がクレゾール^{せつけんえき}石鹼液でトロロアオイを貯蔵する方法を考案して、夏でも出来るようになった。昭和十年前後、その頃からやな、美濃に専属の紙が多くなるのは。というのは、百姓では飯を食えない場所やし、うちのおじいさんは粟や稗^{あむ ひえ}ぐらいが主食やったから、生活が豊かになって米の飯が食いたい、そのためには、年中紙を漉いてそれを売っていくしか手がないということじやったげな。片知も蔵生^{むらび}も、美濃全体がそういうふうじやった。

わしは、高等小学校を卒業すると、紙を漉くようになった。試験場へ習いに行くものもおったが、わしは家で親父から教えてもらった。昔は、習いの時は、誰でも背中から体を接して手を添えて教わったもんじや。じやが、親父は体が小さくて、わしは体が大きいから、それが出来ん。で、親父は横に立っておつて、説明するだ

けじゃった。わしの場合、修行はかなり難しかったのう。それに二十歳前後は、谷戸の新宮さんを訪ねて古い文書を見せてもらったり、あれこれと調べたもんやった。

おじいさんは、七十三で亡くなったが、チリ取りはおじいさんに教わっておる。蕨生のように川の流れのなかでチリ取りができるところは紙がきれいにできるんじやけれども、わしのところのように溜め水でやらんならん所はそんな訳にはいかん。きれいな紙を作りたい一心で、わしはおじいさんに教わった西国三十三番の御詠歌を歌いながら、あれこれ工夫してやったもんじや。

昔は、同じ美濃でも水質によつて漉く紙が違つておつたし、世の中の好み、扱う人が変わることで、随分変わつてきたもんじや。片知でいうとな、親父の代までは、坂下紙という赤みのある田舎障子を漉いておつたが、そのうち、美濃書院という高級な物に発展していく書院紙を漉くようになっていった。それには、いろいろな有利な条件があつたが、やはり一番は、川の水が豊富で、しかも自然の湧き水にも恵まれ、自然漂白やチリ取りができたということじや。わしは、全国をまわつて紙の研究をしてきたが、紙にとって、水は大切な鍵じや。全国どんな紙の産地も、絶対長良川の水で漉いた障子紙はまねできん。日本中歩いて、紙を漉くところで長良川ほどきれいな水は、まず無いねえ。

このころ、大学を出た孫が、「おじいさん、おれも『紙』やつてみたい」と言うようになった。わしは、孫にこうやつて言つてやった。「それやるんなら、時代の流れが違つとるで、紙というものはどんなふうにするものか、機械製紙へ入つて、二年ほど現場を見てこい。手漉きは、お父さんとお母さんがやつておるから、じっくり見てきた目で、それから勉強していけば良い」と。

わしは、人間一生勉強やと思つとる。わしやあ、ごまかしが嫌いな性分やで、とにかくにせものは作らん。最後は誰かが分かるじやろう。いつとき金を儲けるのではなくして、いかにして美濃の紙、美濃和紙の技術、精神を残していくかということを考えておる。

この前、アメリカへ国宝展に招かれて行つたとき、会館の館長が、千三百年の伝

統を持って今なお生きておる和紙があることに驚いたと言っておった。今、マシンペーパーだと百年で酸化してボロボロになってしまう。千三百年生きておるこの和紙と同じものを作るべきじゃないかと言われた。ありがたい言葉じゃ、と聞きながら、わしは少々銭がかかっても、国として残すべき書類は手の楮こうその和紙で残してもらいたいと思った。

こんで、七十年近く紙を漉いてきたが、いっぺんもやめたいと思ったことはなかったのう。『紙』をやるのでもなんでも、結局、基本を大事にしていかなきゃならん、科学じゃなくて実感で。特に手でやるものはそういうことが大事だと、わしは思う。長い間やっているうちには、いつの間にか身についとつたり、ふつと見えてきたりすることがある。紙はのう、漉く人の心を映すんやな。けんかした後に漉いた紙はあかん。正直なもんでそんな時は、紙の繊維をようおさめれえへん。ほうやで、紙を漉くときは、とにかく一生懸命でなけな……。

ええ紙はなあ、「一枚いくら」で頼んだら絶対出来んぞ。いくらで注文を受けたら、人つちゆうもんは、「一時間にどれだけ漉く」という計算をするからダメやな。そんでは、ホントの紙はできん。だから、わしに言わせたら、ホントの紙を見る人が欲しいのう。紙の良さを見る人を……。

もうすぐ八十じゃが、美濃和紙の行く末を見定めるまでは、わしは、しばらく死ねん。そう、思つとる。

美濃北中学校作（平成五年八月）

（注）トロロアオイ…楮などの原料の繊維を水の中にまんべんなく行き渡らせる
とろみのある汁を出す植物